

# 慈 廣 寺

## 開山と宇利城主

宇利城主の熊谷撰津守直利（別名、備中守実長、忠重、重長、直盛）が、当時衰微していた寺を大滝沢から坂というところに移し、伽藍を整えました。文明13年（1481年）のことです。そして、大洞山泉龍院の二世和尚の高弟、字崗祖文和尚を招き、曹洞禅宗寺院としました。慈廣寺が建立された場所は宇利城のふもとで、宇利川の対岸に位置する中宇利の坂という所です。ふだんは熊谷氏の参禅の道場であり、祖先の菩提を弔うための寺院でしたが、ひとたび戦となれば、宇利城の郭の一角を担うような位置にあったのではないかと考えられます。

このような寺院に招かれた字崗祖文和尚は、開山第一世には大洞山泉龍院の大和尚を勧請（招くこと）し、自らは第二世となりました。しかし、実質上の開山が字崗祖文だったことから、古くは「字崗寺」と称されていました。

享禄3年（1530年）11月4日、松平清康は東三河の支配をねらい、宇利城の熊谷備中守を攻め滅ぼしています。宇利城が落城した時に慈廣寺も焼かれています。大壇越の熊谷氏の滅亡で、直利は落ちのびた後に没したようで、法名は次のようです。

宇利城主熊谷備中守「高賢院殿良嶽宗俊大居士」（享禄4年十月二十日卒）

熊谷氏の滅亡と伽藍の焼失は、寺にとって大打撃でしたが、なんとか存続していったものと思われます。

## 江戸時代の慈廣寺と寺領

寛永13年（1636年）以降、中宇利・下宇利を領したのは安部氏でした。半原の開発を行うと、この地に役所（のちに陣屋）を置き、真言宗洞雲寺を建立し、藩主信盛の甥を住職に迎えています。半原は下宇利村からの分村でしたから、もとは下宇利の村民で、多くは慈廣寺の檀家であったといわれています。このこともあり、また、信盛が時の住職に帰依していたこともあって、その斡旋により、慶安2年（1649年）、將軍家光から「朱印状」を受け、15石6斗あまりの地が朱印地として認められ、免税の地とされています。

さらに、安部家からは現在の大幡の地を与えられ、坂から移転しています。移転以降、慈廣寺は大いに栄え、延宝8年（1680年）に現在の伽藍を建立しています。

<参考：慈廣寺史>



慈廣寺の本堂